

はじめに

土木学会は海外学協会との協定に基づいて、現在 16 の学協会との相互交流を行っている。昨年 9 月に東北大学で開催された全国大会には、韓国土木学会 (KSCE)、台湾土木学会 (CIHCE)、シンガポール工学会 (SIE) から代表者の参加を得て、相互意見交換や今後の共同研究の可能性を議論した。海外協力では何といても米国土木学会 (ASCE) との関係が重要であることから、土木学会では 1992 年から連続的に会長をはじめ数名の代表者を ASCE 大会に派遣してきた。今年度はワシントン州シアトル市で開催された ASCE 大会へ鈴木道雄会長、三好逸二専務理事、国際委員会からは委員長の筆者と花村哲也副委員長、吉川潤一国際室長が派遣された。さらに、国際セッションを開催するために新日鉄顧問住吉幸彦氏、建設技術研究所内村好氏に参加いただくとともに、展示ブースを JR 東海にお願いした。また、同じシアトルで大会前日にアジア土木学協会連合協議会 (ACECC) の総会が開かれたが、これに参加した JR 総研奥村文直氏にも参画いただいた。

以下では ASCE シアトル会議の参加報告を行うものである。

ASCE シアトル会議の概要

参加者総数は約 2 500 名に上ったと大会事務局の発表であったが、広大なシアトルコンベンションホールではほどほどの参加者という感じであった。

開会式での Delon Hampton 会長の講演は ASCE の置かれた状況がそれほど楽観できないことから「変わらねば」という問題意識を会員に与え、そのためには教育とリーダーシップの育成が最も重要であるということをも、大変な情熱を持って語りかけた。講演終了時には、会場を埋めた多くの聴衆からのスタンディングオベーションで迎えられ、Hampton 会長の主張への賛同が得られていた。なお、ASCE 国際委員会の細かい配慮によって、特別に国際協定学会からの参加者への特別席が用意されていた。

国際セッション

以下の 2 つのセッションでわが国からの貢献を行った。

(1) 日本における先端的土木技術

前回まではわが国における大規模プロジェクトの成果報告が中心であったが、今回は趣向を変えて、日本の建設業界の現状紹介と特筆すべき土木技術の解説とを行って、併せて平成 13 年 4 月に開催される第 2 回アジア土木技術国際会議の概要案内を約 50 名弱の参加者を得て実施した。嘉門雅史 (第 2 回アジア土木技術国際会議の概要案内)、内村 好 (建設業界の現状と動向)、花村哲也 (わが国の先端的土木建設技術)、住吉幸彦 (新材料としての鉄鋼材料) の順に話題提供した。準備不足もあって若干内容のまとまりに欠けたこと

は否めなかったが、聴衆からの質疑も活発に見られ、概ね受け入れられたものと考えている。

(2) 新しいメガレブ交通システムの発展

ヨーロッパ、アメリカ側も含めた磁気浮上鉄道技術の開発状況が紹介された。日本側から鉄道総合技術研究所の奥村文直氏がリニアモーターカーの技術開発状況を発表し、実証段階にある唯一の具体的事例であることから、質問や討論が集中した。

国際ラウンドテーブル

時代を反映して「e-commerce」が討論のテーマとされた。あらかじめ参加各国へ質問表が配布されて、当日までに各国の状況の取りまとめを要請された。わが国からは鈴木会長が概要紹介を行い、内村氏がわが国の現状と今後の動向を含めて説明を行った。e-commerce は土木業界でも今後世界の主流になる可能性が高いことから、設計を含めた契約形態や物品調達をはじめとして、関連事項の世界標準の確立が必要であることなど真剣な討議が行われた。各国からの貢献では英国ならびに南アフリカ、韓国からの発表に参考にすべき点が多かった。

この討論の結果は ASCE のホームページに取りまとめられているので、興味ある方は参照していただくと幸いである。

展示について

会場の中でも最もアクセスしやすい場所で、しかも広大なフロアを占有して展示が行われていた。日本からは JR 東海ならびに海外建設協会の協力によりリニアモーターカーの模型、ビデオ、パネルなどを用いた展示が行われた。上記奥村氏のプレゼンテーションに直接関連することから、磁気浮上鉄道技術に興味を持つ参加者からの質問が多かった。なお、ブースでは第 2 回アジア土木技術国際会議のプレティンや ACECC の資料の配布も行った。

展示では企業の参加のみでなく、学会や大学なども展示に工夫を凝らしており、極めて情報量が豊かであったことと、インターネットカフェも 10 台ほどの規模で開設されており、日本語をはじめとして外国語のメールも読めるなどの特典もあって、多くの参加者に好評であった。

その他のハイライト

ASCE の 2000 年度総会では、Hampton 現会長から、新会長の Robert Bein 氏への引継ぎ、運営報告ならびに ASCE の学会賞の授与式などが行われた。特に会長就任式では Bein 新会長が 21 世紀の ASCE のあり方に関してなかなか熱のこもった施政方針演説を行い、国内国外での米国の指導的立場の構築に対する積極策を述べており、スタンディングオベーションで迎えられていた。なお、学会賞に関しては日本から日本大学の津岩夫氏らのグループが Karl Emil Hilgard 水



ASCE年次大会インターナショナル・デレゲーション

理賞を、京都大学の中島正愛氏らのグループが Moisseiff 賞を受賞された。さらに、2002年にASCEは学会創立150周年を迎えることから記念基金の募集を大々的に実施しており、「Building The Future」というスローガンで寄付依頼がなされていた。

国際委員会主催の夕食会では各国ごとに余興が飛び出し、それぞれのお国振りもあって楽しいものであった。

最終日の Gala Dinner Party では今年度新たに選出されたASCEの名誉会員6名の紹介があり、新メンバーはすべてタキシードで正装して登壇した。アジアからは国立シンガポール大学名誉教授の S.L. Lee 氏が選ばれており、筆者の長年の友人であることから大いに祝福したものである。

おわりに

国際委員会ではASCEとの関係を最重要事項の一つとして毎年会長をはじめとして多くのメンバーを年次大会へ送り込んでいる。JSCEの貢献がASCEの中でもそれなりに評価されているものの、英国土木学会やその他の英語を母国語とする協定学会との関係に比較するとやはり明確な差が存在することを意識せずにはおられない。今後ますますASCEとの関係を強化するとともに、所要の経費に対する便益に関する厳正な評価に基づいて、他の協定学協会との関係強化とのバランスをどのようにして図るかについて、国際委員会の内部でもコンセンサスを得る必要があるものと考えられる。

(2001年1月11日・受付)